



発行：NPO 法人シャローム事務局

〒960-1241 福島県福島市松川町字東原 17-3  
TEL / FAX 024-567-5322Web <http://www.nposhalom.net>  
E-mail [info@nposhalom.net](mailto:info@nposhalom.net)

発行責任者：大竹静子

## ひまわり感謝祭、開催せまる!!

十二月十日(土)  
A.O.Z.で待っています

「ひまわり感謝祭&共に生きる仲間たちのコンサート」の開催準備が急ピッチで進められている。今回は「ひまわり感謝祭」のメインゲストに奥田知志氏をお招きし、六月に開催した人権フォーラムを受けて「人権フォーラム Part II」が行われる。震災・原発事故から六年、福島のみちの中を歩いても表面的には震災の傷跡を見つづけることが難しくなってきた。至るところで行われていた除染作業もほぼ見られなくなっている。しかし、市内の片隅には除染の残土の仮置き場があり、黒い土嚢袋が石垣のように積み上げられている。仮設住宅には、多くの人たちが生活している。全村避難となっていた飯館村も来年の四月には帰村となる。住民は、その中で定住地の選択を迫られている。

時間の経過とともに、状況は確実に変化してきている。原発事故の波紋は、一人一人の生活を変え、時間の経過とともに新たな問題を生み出していく。三歳だった子どもは九歳、小学校三年生。今住んでいるところが生活の場となっている。大人は仮住まいと思っても子どもにとってもそうではない。仮設住宅の老人は、高齢化とともにもう農業へは戻れない。同居して

いた三世代が、避難とともに分断される。核家族に解体されると元には戻らない。お金で処理しようとする賠償金の中で、住民間の格差が生まれ隣近所の人間関係を分断する。放射能への不安は、世代間、夫婦間、地域間でも大きく異なる。避難者への「いじめ」は、福島への理解のなさや放射能への不安から全国各地で発生している。

原発事故という人災によりもたらされた地域の分断、そこから生まれる人間関係の喪失。分断された人間関係のひずみは社会的弱者である子どもや老人、失業者、母子家庭に顕著に表れる。孤立化の中で、自己責任による判断を求める社会の冷酷さが災害による二次災害を生みだしている。生きていく人間として向かい合い、助け合っていくことの大切さを身をもって学んだ福島だからこそ、今、福島から人権を問いただすことができる。被害の当事者として災害に向かい合うことから、命の大切さを実感する。

ゲストの奥田知志氏はホームレス支援を永年続けられてきた。生きる場を失った人間一人一人に寄り添い、生きることの素晴らしさをともに見

い出していこうとする姿がある。長年続けてきた「北九州ホームレス支援機構」を解消し「抱撲(ほうぼく)」と改称した際に、抱撲社会を目指して次のように述べている。

「抱撲は老子の言葉です。抱は、抱く。撲は、原木の意味です。抱撲には、大きく二つのテーマがあります。

第一のテーマは、受容と希望です。山から切り出された原木をそのまま抱く。製材所に運ばれて整えられたら受け止めるのではなく、原木をそのまま受け止めるということ。その時、希望が生まれます。原木は、役割を得て、杖や家具となり、他者のために生き始めます。

第二のテーマは、絆は、傷を含むということです。原木のままお互いに抱きとめるということは、傷つくことが伴うということです。

しかし、傷ついても引き受けてくれる人、地域、社会が必ず必要です。社会参加、受容的社会こそが、自立を支えます。」

講演後は、みなさんにも参加していただきながら座談会の時間を設けます。みなさんとともにこれからの未来に希望を見いだすことのできる時間を共有できればと思います。

イベントの詳細はチラシ等をご覧ください。様々な企画でいっぱいです。十二月十日、A.O.Z(アオウゼ)でお会いしましょう! (代表 大竹静子)

朝の日の出が遅い。五時半ではまだ真つ暗。六時半ぐらいいにならないと太陽が顔を出さない。朝晩の気温も低くなって、雪がいつ降ってもおかしくない季節となった。今年のカレンダーの残りも少ない。年内に終わるべき仕事を終わらせなければ...

「ひまわり感謝祭、一年をかけて行われてきた「ひまわりプロジェクト」の締めくくりとして、今年も行われる。栽培協力者の受付から始まり、種の発送、ひまわり大使の派遣、種の回収、油を絞る「みんなの手」が完成。この過程でどれだけの人が関わっているのか。日本中の善意の手が一つになつて作り上げた黄金の愛の雫、それがひまわりオイル「みんなの手」であることを思う。

人の気持ち繋がって、新たな人の輪を作っていく。人を知ることが距離を超える。日本地図でしか知らない場所が、一人の仲間ができることで、その地が仲間の生きている場として身近に感じられる。災害のニュースが自然と気になつてくる。地震、台風、噴火、心配し合うことで連絡を取り合う。その繋がりでもきた仲間が福島に来てくれる。スタッフが一生懸命準備に取り組んでいる。人の出会いと善意の輪、苦勞の分だけ喜びも大きくなる。今年を締めくくる「ひまわり感謝祭」楽しみにしている。



(T.O.)